角筆文献研究の歩み

文学部　小林芳規

鈍牛の如く

二十世紀には東洋の文字文化に三大発見があった。中国大陸における，甲骨文字，敦煌文書，そして木簡である。角筆文字は，これに次ぐ発見に価するのでは，と或る東洋学者が語ってくれた。

成程，角筆文字の源が中国大陸にあり，しかも二千年前の現物が残っていることや，文献の群として発見されていることにおいては，それに似た所がある。その上，今，開拓途上にあって次々と発見されつつあるという点では，木簡の発掘に通ずる所もある。しかし，それらに比べて未だ初期の段階にあって，研究も緒についたばかりであるという意味では，真の評価はこれからであるかもしれない。今は，'角筆文献'——角筆文字の書かれている古文献——という術語を使い始めた当人でさえ，この用語を口にする時，ある気恥しさを覚えるほどである。

先日，総合科学部・基礎科学研究の好村滋洋教授と款談した時，談たまたま角筆のことに及び，角筆文献の発見は，自然科学で近頃話題になっている"セレンディピィティ（serendipity）の大切さ"に通ずるということになった。この語は，或る英和大辞典によると，「当てにしない（いい）ものを偶然に発見すること」とある。この語がSerendipという地名を表わす固有名詞から普通名詞に転成したことに，日本語の類例（例えば，「会稽」が中国の山名から"恥をそそぐこと"の意に転義する）を思い合せて興味を覚えたが，角筆文献を初めて発見したのが偶然であったという点では，似ているのかなとも思う。それはこんな状況であった。

三十年前の昭和三十六年九月，東京・上野の某デパートの人混みの中で，私は，とあるものを見詰めて時の経つのを忘れていた。ガラスケースに収まった巻物の上に書き込まれた不思議な文字に魅せられていたのである。その文字は，色ではなく，爪で迹を付けたような凹みであった。蛍光灯の光の反射が，条件よく，この黄麻紙を凹ませて掻いた昔の仮名文字の陰影を浮き立たせている。その文字は，今から千五十年ほど前の平安時代中期に書き込まれた現物である。それは，奈良時代後期に書写された『漢書』の墨書の漢文に，訓点として書き込まれた仮名であった。

この『漢書』は，このデパートで催された「高野山秘宝特別展」に展示された新資料の一つである。その漢文の墨書には，同じ墨色で付けた小字の仮名などが訓点として書き込まれている。この訓点を模写すべく日参している時に，同席の築島裕氏の注意を得て，たまたまあの凹みの仮名文字の存在を知ったのである。

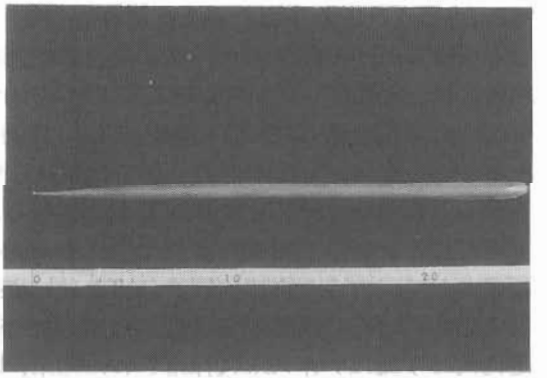
それから約一年後，東京の五島美術館で古経巻の調査をしている折に，再びこの不思議な凹み文字に出逢った。二つあることは三つあるに違いない。もしかしたら何か問題になるかもしれない。そんな思いが頭をよぎった。

そのころ，私は，漢文の訓読の歴史を研究課題として，古寺や文庫に調査に出かけ，資料を集めていた。漢籍が日本にもたらされて上代人の学問のテキストに採用された結果，われわれの先人は長い時間をかけて，これを日本語によって読解することに努めて来た。その歴史を解明することは，言葉の上だけで

なく文化史の上からも重要な課題である。その歴史が「漢文訓読史」であり，その基礎となる資料が，漢文の字面に直に訓点を書き込んだ，訓点資料である。その訓点は，白粉や朱書まれに墨書などで施される。

戦後の国語史の学問において，この訓点資料を網羅的・組織的に取り上げて先ず表記面から新生面を拓かれたのが，恩師の中田祝夫先生であった。その高弟の築島裕氏（現在，東京大学名誉教授）は，更に一歩進めて，その言語――訓点語――を文法・語彙の面から体系的に記述して共時論的研究に成功し，昭和三十九年日本学士院賞を受賞された。弟(おと)弟子の私は，卒業論文で，その言語の歴史的研究が新しい研究分野として開拓されうると悟って，通時的研究を自らの課題とした。その頃は，「訓点語」という用語が耳新しく響き，口にするのも気恥しい思いがした。今は，訓点語研究が，国語史研究の主流と見なされるほどになっている。

角筆文字は，そんな折に，先ずは訓点資料の色の訓点を調べている間に，偶然に見付かったものである。珍しいものの発見には感動が伴う。一点一点の発見ごとに感動のドラマがある。それに魅せられつつ，凹み文字への関心を捨てずに，調査の歩みを牛の如くに続けているうちに，角筆文献の点数が増えて来た。



木製角筆の全容（御調八幡宮蔵）

百点目になった時点で，まとめてみたのが，この度の拙著『角筆文献の国語学的研究』である。460点を数えるようになった平成三年四月現在の目から見れば，十全とはいえない。あれから後，広島県三原市の御調八幡宮の古経蔵から出現した木製角筆は，その先端の使い古された状態と付着繊維が古代紙のものであったことによって，‘角筆’が筆記具であることが判り，江戸時代の学者の臆測説を正す，決定的な証拠を得させてくれた。これは，文学部・考古学の潮見浩教授（現学部長），理学部・植物形態学の田中隆莊教授（現学長），同・中田政司氏の御教示・御協力の賜物である。更に又，三原市立図書館の書庫からは，42点計191冊の角筆文献が新たに発見され，それが三原在の儒家や文人の書いたものであることから，備後の方言史の資料が得られ，方言史料が全国的に得られるきっかけとなった。その辺の事情の大要は，本誌「広大フォーラム」の1989年11月20日号（276号）に紹介させて頂いてある。

現在，角筆文献の発見が460点に達し，近時急速に増え出したのは，同じ調査仲間や教え子も発見し通報してくれるようになったことが大きく働いている。

思えば，良き時期に学び始め，良き師，良き先輩にめぐり会え，良き同僚，そして優れた教え子たちに恵まれた。この鈍き牛は，運にも恵まれたのだとしみじみと思う。

広島大学の各部局からも発見が続く

昨年，三月まで私どもの国語学国文学研究室の助手を務めてくれた山本真吾君が，四月から三重大学に勤めることになり，着任早々の挨拶に，‘三重大学附属図書館の書庫に入って調べたら，角筆文献が13点計46冊見付かった’と知らせて来た。次いで，津市立図書館に土地の旧家から寄贈された古書類からも，13点計55冊の角筆文献が見出され，引き続き調査を継続中という。今年に入っても，他用で出かけた刈谷市の愛知教育大学で，たまたま附属図書館の蔵書を調べたら，ここからも

角筆文献が見付かったと知らせてくれた。

'対岸の火事'ではなく，お膝許のわが広島大学においても，あちこちの部局から角筆文献が発見され始めている。文学部の蔵書から角筆文献が見出されたことは，先掲の本誌276号で報告させて頂いた。そこでは，わが国語学国文学研究室の慶長古活字版をはじめ，中国語学中国文学研究室の6点計43冊，中国哲学研究室の4点計19冊が見付かったことを述べ，「他の研究室からも見つかるであろう。中央図書館を始め，各分館，関係学部の古文献の徹底的な調査の必要を痛感している」と記した。

その後，文学部の国史学研究室からは，瀬戸内海に関する歴史書の『豫章記』や，『明応板三體詩』から角筆文字が見付かった。又，元国史学教授の福尾猛市郎先生から寄贈された「福尾文庫」の中からも，室町時代書写など3点の角筆文献が見出されている。

昨夏には，教育学部の旧福山分校蔵書から2点4冊の角筆文献を，同学部の沼本克明教授が発見されている。

この平成三年度の新学期に入った四月早々，東千田の附属図書館本館に収蔵されている「古賀文庫」（ダンボール箱92箇分）を，同図書館の方々のお世話で調査させて頂いたところ，6点計21冊の角筆文献が見出された。「古賀文庫」は，本学が新制大学として出発した初代の附属図書館長の古賀行義教授が寄贈されたもので，御郷里の福岡の実家に伝わって来た古書である。その中には，角筆で，「粥（かゆ）」を「カイ」と書き，「教育」を「キョイク」，「侍妾」を「ジショ」と書くなど，当時の方言をうかがわせる資料もある。

引き続いて行った学校教育学部分館の調査では，旧浅野藩の藩校の教科書などから，16点計129冊の角筆文献が，予想通りに，見出された。その中には，角筆で年月日を書いた資料も出て来た。又，明治十一年に出版された木版本の中に角筆の凹み文字が見付かり，角筆の下限は江戸時代ではなく，明治時代になっても使われていたという，新事実も判明した。

学内の各部局にある蔵書の徹底的な調査の必要を痛感すると，先に書いたことが現実になって来た。今後も，更に発見されることであろう。

広島大学外の，広島県下に蔵せられる角筆文献については，昨秋広島女子大学から発行された「広島女子大国文」第7号（平成2年8月30日刊）に，「広島県の角筆文献」として報告させて頂いた。

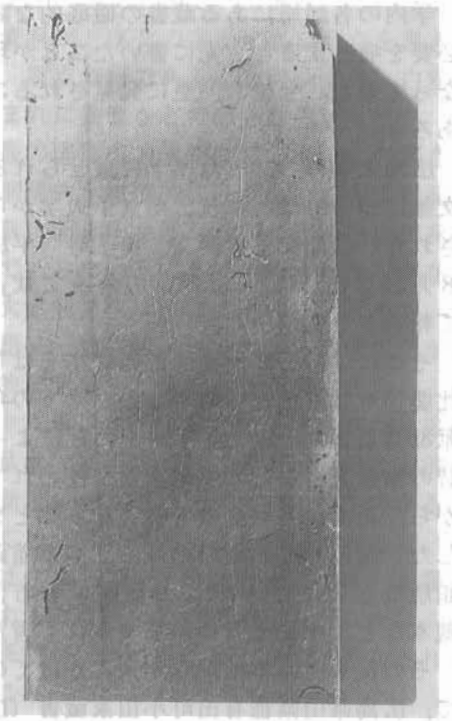
そこには，三原市立図書館蔵本をはじめ，比婆郡東城町正安寺蔵本など，県下の角筆文献89点計357冊を一覧し，それらによって，昔の備後方言などの土地言葉が使われているから，新たに方言史の資料となることを指摘した。関連して，山口県萩市立図書館蔵明倫館版など47点計144冊，鳥取県米子市吉祥院蔵本など，中国地方の角筆文献にも言及した。

その後も，昨年秋から年末にかけての調査で，広島県山県郡有田町小田家蔵書（広島市立中央図書館寄托）から，19点計52冊の角筆文献が発見され，特に県北の昔の方言史料が加わることになった。

今日までに発見された角筆文献は，広島県下だけで100点を越え，中国地方全体では約160点に上る。今日までに全国から発見された総点数460点の約三分の一である。中国地方，中でも広島県下が多いのは，筆者が広島に住み，広島を中心としてこの方面の調査を進めていることによる。稿末の「角筆文献の所在ならびに使用地の全国図」に示したように，角筆文献は，北は青森県弘前市立図書館，南は九州の佐賀市外の岩蔵寺からも発見されているから，今後は日本本州の各地から全国的に発見されるに違いない。

では，何故に，これほどのものが見逃されて来たのか。それは，角筆文字が紙面を凹ませて書かれるという特異な方式であったために，目立ちにくく目に訴えることが弱かったことと，"古文献はすべて毛筆で黒々と書かれるものだ"という"常識"が，他の筆記方法で書かれた文字に気付かせなかったことに

よるのであろう。



角筆で書いた鎌倉時代の文字と絵（岩蔵寺蔵）

角筆で書かれた文字というものは，従って，メモに適する。メモ用であるという意味では，角筆は今日の鉛筆に似ている。鉛筆で書いた文書が公的な文章や証文にならないように，角筆で書いた文献も証拠として残される意図はなかったであろう。あくまでも一時的であって将来にわたって長く保存されることも意図されない。それゆえ，今日に残る書物の形態としては，角筆の文字だけが書かれたという独立の文献は期待できず，墨書の文献に附随して，その紙背の白紙とか，巻末や本文の空白部分などに書かれた文献が普通である。

それだけに，いわば「褻」の文字としての角筆の言葉には，毛筆と違って，規範にとらわれない日常的な口頭語が反映され易く，そこに古人の生き生きとした生活が見えて来る。

先の拙著においては，京都や奈良など古代文化の中心地の角筆文献を主材料として，時代を溯り，平安時代などの口頭語を探り，それには言語の変化が現われ易く，毛筆の規範的な言葉よりも早く，時には二，三百年も溯って，認められることを説いた。

その後の調査においては，広島県をはじめ中国地方などの地方の角筆文献が大量に発見され出して，地域的広がりを持ち，各地の昔の方言を知る資料が得られ始めて，方言史を新たに開拓する可能性が生まれた。

角筆文献は，このように国語史の上で重要な新資料になるのであるが，言葉の問題だけに止まらず，角筆が毛筆を主とした時代の古典籍に広く使われている以上，古文献を対象とする学問に広く係わってくる。伊勢物語の古写本に角筆で口頭語の注釈が書かれたり，鎌倉時代の北九州における連歌資料が初めて角筆の文字から認められたりしたのは，国文学に係わる。又，佐賀県岩蔵寺の宋版『大般若経』の527帖にわたって，角筆で書き入れられた文字や絵からは，北九州の埋もれた文化の一面が掘り起されて，国史学や仏教史学に係わる問題を提供する。更に，絵画の下描きの技法として角筆が使われていることは，中国を源として，わが国では法隆寺金堂壁画（焼失）をはじめ長く後世にまで行われていることと併せて，美術史の問題に係わって来る。

今や，角筆文字・絵の発見に伴い，古文献全体について，新しい“角度”から――角度とは学問方法の抽象的な意味だけでなく，具体的にも紙面を凹ませて書いた文字や絵を発見するための目の角度も併せて――見直す必要を痛感する。もはや一個人の調査・研究だけでは，処理し切れなくなりつつある。

今後の展望

角筆文献研究の今後について，私の願いを「展望」として述べさせて頂けるなら，次のような夢を語ってみたい。

Ⅰ．角筆文献の発掘調査の組織的活動

中国地方をはじめ，全国の大学図書館，各研究室，あるいは公共図書館に寄贈・寄托されたり，土地の旧家の土蔵に眠っている角筆文献を発掘調査する。これには全国規模の調査組織が作られれば一層効率的で

ある。この場合の調査は，従来のような書名を目当てにして特定文献を調べるのと違って，古文献全体をしらみつぶしに点検しなければならない。

又，古社寺や文庫等に蔵せられる古典の古写本や古典籍についても，角筆文字の有無を再点検する必要がある。

日本だけでなく，中国大陸からも既に角筆文献が発見されているので，大陸の各地に蔵せられる古文献を，古代の木簡を含めて調査しなければならない。近時，中央アジアにもあるという情報を得た。

Ⅱ．角筆文献の保存・活用活動

角筆文献の原本は，一箇所に集め整理・保存すると共に，研究・教育に活用する。

学内の各部局・研究室に多量に存することは先述の通りである。出来れば，これらを一箇所に保管することが活用には便利となる。

これを機に，個人の旧家伝来の角筆文献の寄托・寄贈の態勢を整える。

原本が他大学や学外の古社寺等にあるものについては，写真撮影を行い，網羅的に資料を蒐集して，研究・教育上の活用の資とする。

Ⅲ．研究活動

広く蒐集した角筆に関する資料を，分析し，言語・文学・歴史・芸術など文化史の諸方面より考察する。

言語については，特に口頭語の資料という面より，口頭語史や方言史の資料として新分野の開拓に資する。その他，国文学，国史学，中国語学中国文学，仏教史学，美術史学などに係りを持つ。

Ⅳ．機器の開発

紙面を凹ませた昔の文字を読解する場合，長い年月を経たものは凹みも薄くなり，困難が多い。幸い，理学部の協力を得て，放電物理学の吉沢康和教授により「角筆スコープ」が開発され，現在も改良を重ねている。これらを各研究者，研究機関，各図書館等に配備するならば，角筆文献の調査，解読が効果的に進められることになろう。

Ⅴ．情報蒐集，提供，及び公開活動

全国の角筆と角筆文献に関する情報を蒐集するセンター的な役割を果すと共に，新たに発見される角筆文献についての情報を絶えず広く提供する。

又，角筆や角筆文献について原本，現物や写真などを常時又は定期的に展示して，普及活動を行い，新たな情報を得る手がかりとする。

要すれば，研究誌を発行する。

Ⅵ．教育活動（調査・研究者養成）

角筆の文字は凹みであるから，通常の角度から見たのでは見えない。見方を習得するためには，原本についての実習が必要である。そのために講習会など開く必要がある。

又，取り扱う文献は，古典籍・古文書であるから文献学の基礎知識の学習が必須である。そのためには，書誌学をはじめ国語学・国文学・国史学・中国語学中国文学・仏教史学・美術史などに係わる総合的な知識が学習されなければならない。

以上のようなことが実現できるならば，緒についたばかりの角筆文献研究も，大きく実ることになるであろう。

角筆文献の所在ならびに使用地の全国図

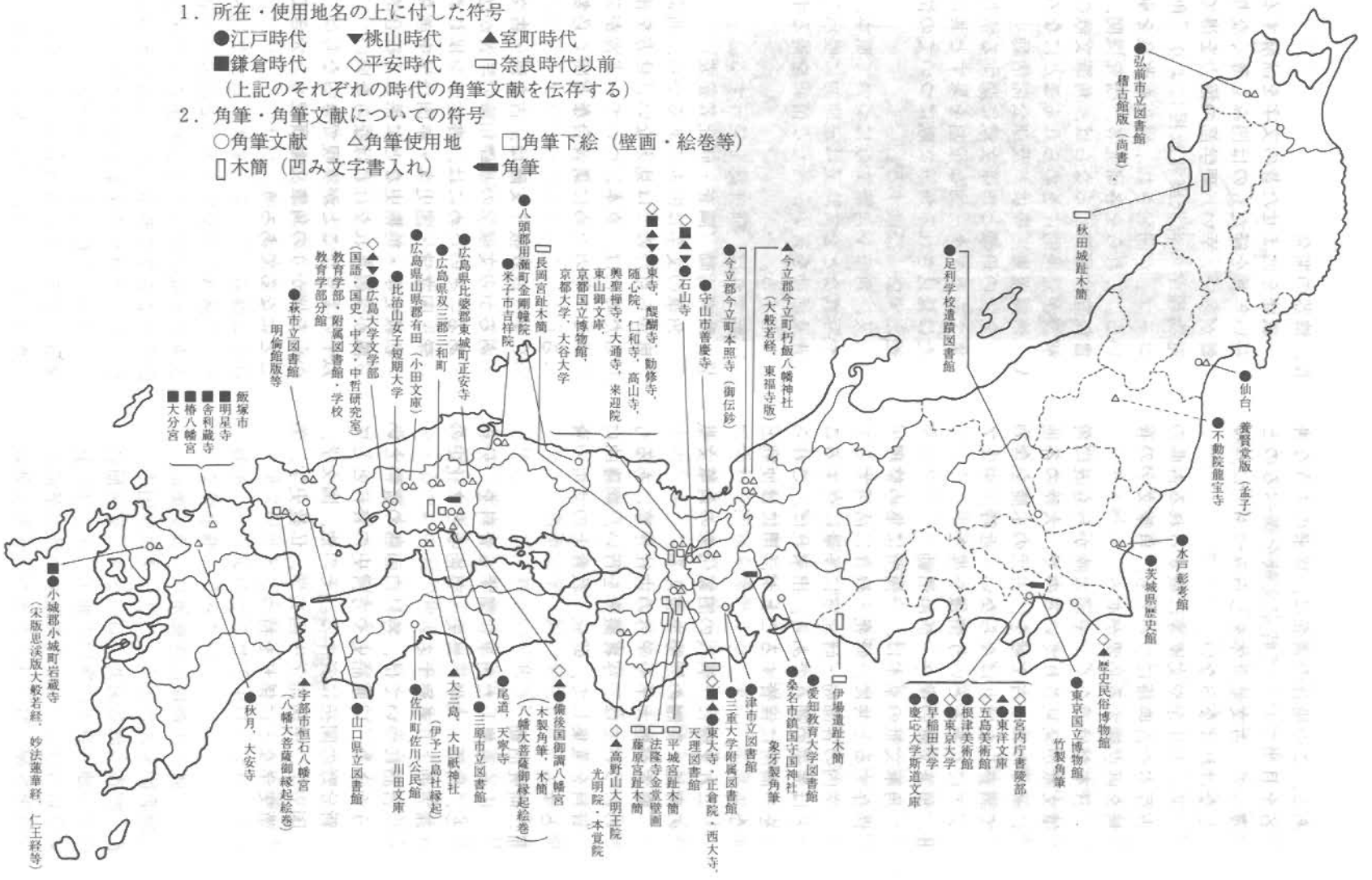
1．所在・使用地名の上に付した符号

●江戸時代　▼桃山時代　▲室町時代

■鎌倉時代　◇平安時代　▭奈良時代以前

（上記のそれぞれの時代の角筆文献を伝存する）

2．角筆・角筆文献についての符号

○角筆文献　△角筆使用地　□角筆下絵（壁画・絵巻等）

▯木簡（凹み文字書入れ）　▬角筆